

# 真言宗における『発心即到』について

栗山秀純

## I

真言宗における『発心即到』の問題は、宗義決択のための諸論義書において成仏論・修行論・機根論等の立場から種々論じられており、「発心即到」「上根上智」「発心識体」「地前地上」「初地即極」「三密具不具」「三品悉地」等々の算題を掲げ直接・間接にこの問題に触れているが、いずれにしても真言宗所被の機根の中に『発心即到』の機のあることを認めている点に注目しなければならない。

この『発心即到』の語源としては、弘法大師空海（七七四—八三五）の『般若心経秘鍵』に  
夫レ仏法非遙ニ心中ニ即ニ近ニ真如非外乘ニ身何求ニ迷悟在レ我則発心ニ  
即ニ到ニ明暗非他則信修ニ忽証ニ

と説かれていることによるとされているのであるが、諸種の論義書において『発心即到』を論ずる本拠は『大日経疏』第一に十九執金剛の第十一勝迅執金剛を釈す文に

真言宗における『発心即到』について（栗山）

第十一勝迅執金剛者 勝ト謂ハク大空ト大空即是遍一切処ト故能起ス速疾神通ト也 住ニ此乘ニ者初発心時即成正覚ト不レ動ニ生死ト而レ至ニ涅槃ト故名ニ勝迅ト

と説かれている文の中の『初発心時即成正覚』を問題として、無修行成仏の機の有無を論じているのである。いま、諸種の論義書のうちその概要を有快（一三四五—一四一六）の『宗義決択集』第八により概観する。

## II

この論義は、真言行人が最初発心の時に修行を用いずに証果を得る機根があるか否かを論ずるのであるが、難答両者の中難方は発心即到の機なしと主張し、答者は発心即到の機もあるとするのである。

難方は、真言宗所依の経論に説かれている三句の法門や五転等の修行の階程、十地十六生の次第を明す文は、いずれも修行得果を示しているものであり、もし修行なくして果徳を得

るとするならば、それらはかえつて所依の経論に説くこれら三句、五転の功德をも欠くこととなり、教法の甚深の義趣を示さないことになる」と論じ、これらの証として『菩提心論』、『大日経疏』二十・『釈摩訶衍論』二等の文を挙げ修行によつて成仏すると論ずるのである。

答方は、機根の上に頓漸を認め、これに発心即到と修行成仏の二機根を立て難方が引証した証文はいずれも修行成仏の機に約した経文であるとし、また、三句・五転の功德も発心を因として果徳を得るのであるから既に初発心の時に諸徳を円満する機もあると論じ、最初発心、纔発心により正覚を得ることを明す証文として『金剛頂経』（不空（七〇五―七七四）訳）第一の纔発心菩薩の内証を説く文、『大日経疏』第一の勝迅金剛の名義を釈する文、『金剛頂経義訳』等の文を引証しそれぞれ修行を用いずに証果を得る義を明していると論じているのである。

III

いま、難答両方の主張とその根拠とする証文等を検討しても、これだけでは何故発心即到し得るかという具体的説明にはならない。ここで問題として提起されるのは、初発心の時何故正覚を成ずることが出来るか、すなわちここに説く初発心にはどのような意義があるかを検討しなければならぬ。

これについては、(1)初発心の位、(2)初発心時の修行の有無、について考察しなければならない。

(1)について弘法大師は『秘藏宝鑰』巻下に第九住心を明している文の中に、

等空之心於<sub>テ</sub>是<sub>レ</sub>始<sub>ニ</sub>起<sub>ル</sub> 寂滅之果。果還<sub>ニ</sub>為<sub>レ</sub>因、是因<sub>ニ</sub>是<sub>レ</sub>心望<sub>ニ</sub>前<sub>ニ</sub>頓<sub>ニ</sub>教<sub>ニ</sub> 極果。於<sub>テ</sub>後<sub>ニ</sub>秘<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>初<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub> 初<sub>ニ</sub>發<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>便<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>正<sub>ニ</sub>覺<sub>ニ</sub> 宜<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>也<sub>。</sub>

と説き『大日経疏』第二の三劫段において三劫に時分と妄執との二義あることを説いて

越<sub>テ</sub>世<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>妄<sub>ニ</sub>執<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>世<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>者<sub>。</sub> 若<sub>ク</sub>以<sub>テ</sub>淨<sub>ニ</sub>菩<sub>ニ</sub>提<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub> 為<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>世<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub> 即<sub>ニ</sub>是<sub>レ</sub>超<sub>ニ</sub>越<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>劫<sub>ニ</sub>瑜<sub>ニ</sub>祇<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub> 梵<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>劫<sub>ニ</sub>跋<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>義<sub>。</sub> 一者<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>分<sub>ニ</sub>、二者<sub>ニ</sub>妄<sub>ニ</sub>執<sub>ニ</sub>……中<sub>ニ</sub>略<sub>ニ</sub>……若<sub>ク</sub>一<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>度<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>妄<sub>ニ</sub>執<sub>ニ</sub> 則<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>仏<sub>ニ</sub> 何<sub>ニ</sub>論<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>分<sub>ニ</sub>耶<sub>。</sub>

と明し、この劫跋(Kalpa)について頓教には時分と見、密教では妄執とするとし、さらにこの三劫を麁、細、極細の三妄執としている。いまこれを同じく『大日経疏』に説く六無畏及び弘法大師の十住心に配釈すると、第一の麁妄執では声聞・縁覚の位に至り、人執の惑を断ずるとする(善無畏・身無畏・無我無畏・法無畏)。第二の細妄執では、法相、三論の位に至り、法執の惑を断ずるとする(法無我無畏)。第三の極細妄執では、華夫両一乗の位である法界平等の境地に至り、さらに真言乘の諸法本不生の觀に住する(一切法平等無畏)。すなわち、この三劫を超越すれば初地の菩薩の位に住し、一

生に成仏すると説いているのである。

このように、初発心の位いとは、初地発心とするのが宗意と考えられるのである。この発心に關して、論義書ではさらに発心の識体を論じ、それを第六意識とするか、第八阿羅耶識とするかを弁じ、発心即到からは、さらに初地即極の問題が掲げられているのである。<sup>10)</sup>

(2)の問題については、頼瑜(一二二六—一三〇四)は『大疏愚草』第三(四十五丁)において、発心即到と初地即極とを合せ論じているが、宥快の『宗義決択集』第八(三十一丁)や果宝(一三〇六—一三六二)の『伝宝記』第二(二丁)等に指摘されているように一応の弁別の上に論じなければならぬ。そして、弘法大師も「明暗非<sup>レ</sup>他<sup>ニ</sup>則<sup>テ</sup>信修<sup>ル</sup> 忽<sup>ニ</sup>証<sup>ス</sup>」と明されているように、発心後の修行については諸師共に認めており、発心以後に修行を必要としないという意でないことは明かである。<sup>11)</sup>

#### N

それでは、真言宗における最初発心が何故初地菩薩の位いであると言われるかについてさらに一考しなければならぬのである。

それは、発心の意義が、最初は仏陀釈尊を理想とし、それと同等のさとりを求める心を発すことに始り、次第に仏陀釈

真言宗における『発心即到』について(栗山)

尊の教化の意趣が一切衆生を成仏せしめる点にあつたとし、そこに二利の菩薩行が生れ、この菩薩行を修することへの自覚によりさらにこの菩薩行への発心の意義が強調されるようになった。そして、このことを『大乘莊嚴經論』発心品には、発心が自利・利他の二利の恩(Grace)によると説き、次第にこの菩薩道を修行しようとする心を発すことが重要視され、この心を発起したものが菩薩と称され、仏陀とひとしい悟りに到る者と見なされ、ついに、「初発心時便成正覺」と断言されるようになった。

真言宗の菩提心は、『大日経』住心品に、真言行人の求めるところの菩提を『如実知自心』の心構えで自心に求めるべきであると説き、三句の法門等の理をもつて明しているのであるが、何故自心に菩提と一切智々を求め得るかを「本性清淨故」と説き、自心の淨菩提心を発得することが、真言行人の心相であると説くのである。すなわち、この住心品においては『求めるところの菩提心』を示して、菩提心のありかを理論的に説いているのである。これに対し、『菩提心論』には、勝義、行願、三摩地の三種菩提心を説いているが、それは最終的には、本有の菩提心を開發するための月輪觀等の三摩地心の証得に結論づけられるのである。そして、この本有本覺としての菩提心発得の起因をその実践門の立場から説いて、

我當レ利益安樂無余有情界<sup>ヲラツテ</sup> 觀<sup>スル</sup>十方含識猶如己身<sup>ノ如ク</sup>と明しているように、菩提心を發起する原因は慈悲心であるとしているのである。

したがって、ただ理として人法に対する執着を離れるだけではなくて、積極的に有情界に働きかけるためにこの三摩地の法門が説かれ、この実践により初めて仏と全く平等となり、初発において菩薩の位に住し、さらに任運無作無功用の究極の方便道における活動がなされるのである。

V

真言宗における機根観の中で、発心即到の一群を認める因由もこの菩提心観の中に内在しているのである。大乘菩薩道思想において菩薩の位を決定するのは、大慈悲心の自覚による発心であり、さらにこの発心を重視しその究極的な表現が、この発心即到の提唱であると考えられるのである。

以上、本論においては真言宗における発菩提心に関してその最も特徴ある主張である『発心即到』の算題を中心に検討したのであるが、これは、ただ真言宗独特のしかも空理空論でないことを確認し、この思想の原点を広く大乘仏教思想の変遷の中に見い出そうとするものである。

1 頼瑜(一一二五—一三〇四)『大疏愚草』三・頼宝(一二七九—一三三〇)『真言本母集』三十二・泉宝(一三〇六—一三

- 六二)『伝宝記』二・聖憲(一三〇七—一三九二)『大疏第三重』三・長覚(一三四〇—一四一六)『大疏指南鈔』一・宥快(一三四五—一四一四)『宗義決撰集』八等に詳細に論じられている。
- 2 弘法大師全集(以下弘全) I、五五四。
- 3 この文は、支那天台第九祖妙樂大師湛然(七一—七八二)門下の明曠(寂年・寿共に不詳)の『般若心經疏』(大日本統藏經第一輯・第四十一卷・第四冊・三二八・左・下)の文を弘法大師が引用したもの。
- 4 大正新脩大藏經(以下大正)、三十九、五八一、c。
- 5 凡修習瑜伽觀行人當須具修三密行、証悟五相成身義上也(大正、三十二、五七二、c)。
- 6 若但有菩提心而不具修三万行終不成果(大正、三十九、七八八、a)。
- 7 行因能起、果徳所起、若無起因即無能入、若無能入不得三所入(大正、三十二、六〇七、a)。
- 8 由緣發心、故能轉妙法輪(大正、十八、二二一、c)。
- 9 住三乘者、初發心時即成正覺、不動生死而至涅槃(大正、三十九、五八一、c)。
- 10 從初發心、便成正覺、常住三乘、智用無礙(大正、三十九、八七一、a)。
- 11 弘全 I、四六〇。12 大正 三十九、六〇〇、c。
- 13 『大疏第三重』五(聖憲)には第六識とし『宗義決撰集』八(宥快)には第八識と主張する。
- 14 三句については、『大日經』(大正、十八、一、b)、『大日經疏』(大正、三十九、五八六、b)に説かれているが、これについて古來四重秘釈や長の三句、短の三句等の解釈もなされている。
- 15 修行論については、古來から三密具不具(三密具闕)、本有・修生(東因發心・中因發心)等の論義がなされている。『密教學研究』第二号一一頁「根嶺聖憲師の三密具闕説」拙稿。
- 16 大正、三十一、五九五、c。17 大正、三十二、五七二、c。